「入れない嫁」から「入らない嫁」へ
—高度経済成長期の牡鹿半島における女性集団の変化—
The Process of Change from wives who "cannot join" to wives who "do not join" *Jo-kochu* groups: A case study of Oshika Peninsula villages during times of high economic growth

戸邉　優美
TOBE Yumi

Abstract

In this paper, I consider how the principle of organizing traditional female groups changed during Japan's turning point period of rapid economic growth. From 1955 to 1973 the Japanese economy maintained a high growth rate which annually exceeded 10%. Moreover, by the end of this period Japan's GNP ranked second in the world, while primary industry stagnated during the same period. For this reason village populations decreased through flows out to urban centers. In recent years, there has been increased concern within the discipline of folklore studies in regard to the influence of high economic growth on village society. Previous research (Cf. National History Museum, 2010) has examined the change of villages from the perspective of political policy and economy in relation to national or local levels of government. However, in what follows I focus on the process in which women performed inter-social choices, taking particular social relations and leaving others, whose decisions were influenced by, for example, enrollment or employment during the period of rapid economic growth.

Every village on the Oshika Peninsula of Miyagi Prefecture that is discussed in this paper has a social structure called *nenrei kaitee* or an age grade system. There was men's group called *Keyaku-ko* and women's group called *Jo-kochu* in every village in the Oshika region, and only a family successor and his wife were able to join. That is to say, there were clearly wives who "can join" and wives who "cannot join" the village *Jo-kochu*. This was a long standing tradition, but, as I herein discuss, the attitude of the wives towards the exclusiveness of the *Jo-kochu* begins to change from the 1960s on. Family circumstances were the main precedent to the

social order of country-side fishing town villages such as Oharahama, because the villagers` occupations were various. Moreover, in order for any women to join the group a mother-in-law`s permission was required. Therefore, Oharahama villagers came to emphasised the home and individual more than the village system. It is, so-to-speak, the awakening of individualism. When the number of married women working outside of the home increased from around 1960, they often chose not to join the group. These working wives often chose "does not to join *Jo-kochu* ". Nevertheless, more "typical" fishing villages such as Kybunhama and Kobuchi maintained traditional rule for the group. However, from around 1965, fishery management began to diversify; for example, one might run a guesthouse as a side business, or change to aquaculture as a means of income, etcetera. The work of unpaid wives was qualitatively altered by these shifts. This generation of women began to have the premarital experience of going to school or working in urban areas for a daily wage while wives born before the Second World War generally did not have such experiences. Thus, wives born after the second World War found meaning in going to work and meeting friends outside the traditional confines of the *Jo-kochu* system. For many of them, village society relationships could be accompanied by some tense relations. It made them think that they liked to do something good for village at their gatherings.

Both of the change from wives who "cannot join" to wives who "do not join" and the process whereby voluntary activity within the village system transformed from *Jo-kochu* are that into the group of a voluntary activity of the village system from a group are the change of wives' motivation to living in a village. These changes are based on based on various factors such as demographic shift and change of personal experience of women.

Ⅰ，時代・村・女性

1，高度経済成長期の村落社会―女性の暮らしと生活革命―

フィールドで年配の女性に出会うと、嫁ぎ先での暮らしの大変さについてお話を伺うことがしばしばある。朝は忙しいので洗濯は夜のうちに洗い干しておいたとか、薪の数が少なく人に分けてもらったとか、電化される以前の家事の苦労話が多い。このような経験を持つ話者は1945（昭和20）年頃までに生まれた人びとが多く、一方で、戦後に生まれ、昭和50年代に嫁いだ女性が家事は重労働だったと語ることは稀である。白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫の普及―1950年代後半の「三種の神器」登場、ライフラインの整備等のいわゆる生活革命は、都市だけではなく地方の人々の生活を大きく変えていった。家事を担う女性にとっては、洗濯機の登場や水道・ガスの整

備によって労働量が大きく軽減されることとなった。したがって、世代によって嫁の家事労働に対する考え方や経験値にも当然違いが出てくる。

世代間の価値観の違いは、技術決定論的な範囲にとどまらない。新制教育下で女子の進学率が向上し、結婚するまで家の外に働きに出るライフコースが一般化していった。娘時代と嫁入の間に社会経験が挟み込まれることは、実家と婚家以外の社会における経験と知識を女性に得させることとなった。昭和初期生まれの農家の女性が筆者に「私らは若いときシュウト（姑）さ仕えて、今は嫁さ小さくなってる」と語ったことがある。彼女と嫁の間にあるギャップは、こうしたあらゆる経験の違いをひっくるめて表れたものといえるのだろう。

高度経済成長期を挟んだ世代間の違いは、個々人の問題だけではなく、人と人の結びつきやつきあいにも及んだ。関沢まゆみは、歴博フォーラム「高度経済成長と生活革命」（国立歴史博物館 2010）の討論において、“専業主婦の大衆化”を指摘している（国立歴史博物館 2010:146-148）。それは、電化製品を購入したことで、時間的・経済的に余裕の出た「新しい主婦たち」の生活に、「遊び」「趣味」の部分が膨らみ、それが個人や友人たちとの交際の中で日常化した、というものである。関沢の発言の趣旨は、女性の時間の使い方の変化についてだが、女性が「家」「村落」におけるつきあいと「友人たち」との交際を区別し、後者を楽しむようになったことにも触れている。嫁・主婦の肩書で参加するフォーマルな関係と、個人として付き合うインフォーマルな関係と言い換えることもできよう。しかし、女性のつきあいや集団を単純にフォーマル・インフォーマルで二分化してしまうことは難しい。例えば、漁師町である千葉県南房総市和田町和田では、長期留守がちな夫に代わって、女性が寄合に参加する。女性はあくまで代理であり、直接役員になったり投票をしたりはしない。ただし、女性同士の雑談で大体の候補者を決め、それを夫に伝えると、夫はその通りに投票する。女性の方がつきあいの状況などをよく理解しているからである（和田 2008:243-245）。このように、インフォーマルな結びつきの中でフォーマルな事項を演出することもある。本稿では、フォーマル性とインフォーマル性が混ざり合う女性の結びつきや集団を、昭和20～40年の時代の経過とともに追うことで、急激な価値観の変化による実態の変容を明らかにしたい。

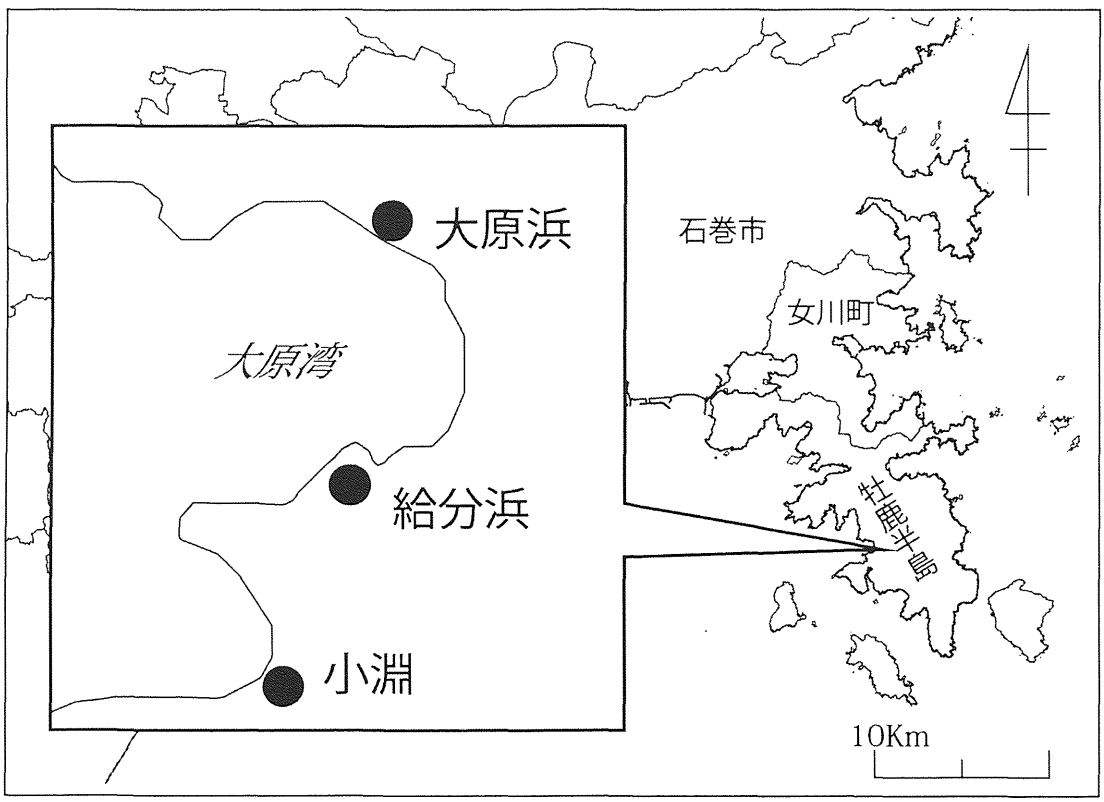
民俗学的視点からの高度経済成長期の村落に関するまとめは、国立歴史民俗博物館『高度経済成長と生活革命』（2010）や田中宣一（編著）『暮らしの革命 戦後農村の生活改善事業と新生活運動』（2011）があり、女性の変化については、生活様式の変化や生活改善運動における意識の高まりについて明らかにされている。また靏理恵子も、昭和20年代から現代までの農村経済を背景に、農家女性が「テマ」から「労働の主体」となり、農村に新たな社会集団を生み出していくエンパワーメント性について述べている（靏 2007）。これらは、国や地方の政策・経済との関わりあいから村落の変貌を明らかにしている。他方本稿では、同じ時代の変革期において、既存の社会関係の取捨選択が行われていく過程をに注目する。本稿で取り上げる宮城県牡鹿半島の諸集落は、同族集団や擬制的親子など上下関係の生じる結びつきのほか、契約講をはじめとする年齢集団秩序、フラットな関係性が重なり合っていた。女性の年齢集団である女講中が、女性たちの置かれた状況や意識によって、その位置付けを変容させていく過程を中心に、牡鹿半島女性

の結びつき・集団について考察する。

2，漁村の村落構造の変容―牡鹿半島村落の昭和20～40年代―

宮城県牡鹿半島は、世界三大漁場に数えられる三陸沖に面した三陸海岸の最南端に位置する(図：牡鹿半島)。藩政期には仙台藩を支える重要な漁業地帯であった。近世から近代にかけて、回遊魚の多い半島西岸の表浜では定置網（大謀網）が発達する一方で、典型的なリアス式海岸である太平洋側の裏浜では釣漁や採貝藻がおこなれた。また、南端の鮎川浜は大正初期～昭和後期にかけて捕鯨根拠地として栄えており、表浜・裏浜・鮎川浜という地域性は藩政期から現在まで行政区画として分けられたことはないものの、町村合併の繰り返された牡鹿半島において一貫していると考えられる。

図：牡鹿半島



本稿では特に、大原浜・給分浜・小淵という表浜の3つのムラをとりあげる。1955（昭和30）年に鮎川町と大原村が合併、牡鹿町が誕生した。大原浜・給分浜・小淵は旧大原村に含まれる。本稿では集落と行政村が混在するので、以降、大原浜等の集落はムラと表現し、行政村は村名で表記する。なお、牡鹿町は2005（平成17）年に石巻市に合併され、現在は女川町を除いた牡鹿半

島全域が石巻市である。

この3集落は隣接しており、小学校区も同じである。ただし、昭和30年頃の職業別戸数をみると、小淵住民のほとんどが漁業関係者であるのに対し、大原浜は「その他」（勤め人など）や製造工業・商業の比重が大きく、在町的性格のムラであるといえる（表：職業別戸数）。小淵の本郷である給分浜は戸数比が小さいため、ムラとしては大原浜・小淵より産業規模が小さい。これらのムラでは近世より大謀網を所有してきた。大謀網は村網であり、ムラ人は網漁に直接参加しなくても、網株を有していれば配当を得ることができた。1949（昭和24）年の表浜漁業協同組合発足に伴い、定置網は漁協に移譲されたが、共有林などムラの入会地利用についても株の所有が不可欠だった。株を持つのは旧戸・旧家と呼ばれる家であり、分家や別家、転入によって新たに生まれた新戸[1)]は譲渡や購入によって株を得た。

表：1954（昭和29）年の旧大原浜の職業別戸数（宮城県水産試験場 1958：221-222）

		農業	林業	漁業	製造工業	商業	その他	合計
裏浜	大谷川	10	3	13	3		2	31
	鮫浦	1		23	2	3	1	30
	前網			25	3		1	29
	寄磯			72	7	1	9	89
	谷川	18	18	27	7	5	16	91
	泊		5	54	6		6	71
	新山			30	3	1	3	37
表浜	小網倉	4	7	36	3	5	6	61
	小淵	**6**	**2**	**105**	**8**	**3**	**20**	**144**
	給分	**3**	**1**	**35**	**5**	**8**	**10**	**62**
	大原	**16**	**9**	**22**	**14**	**15**	**53**	**129**

また、3集落に限らず牡鹿半島の初集落では、マキ・シンルイなどの同族関係、エボシオヤ・ナ

1　家を継がない実子の独立を分家（ブンケ）、養子や奉公人の独立を別家（ベッカ）と呼ぶ。牡鹿半島では超世代的本分家意識が低く、分家というときは三世代以内の親戚を指していることが多い。大原浜では、明治期に分家して発生した家も、初代か、少なくとも次の世代までに契約講に加入しており、非成員差別は比較的早く解消されていたといえる。なお、竹田旦は牡鹿半島のシンルイやマケなどの結合は本家分家関係を根幹とした同族結合と述べており、超世代的本分家関係が強固であるとしている（竹田:1969）。

モライオヤなどの擬制的親子関係、契約講など年齢集団等の社会関係が重なり合って成立している。ムラによって分布や濃淡、組織性に違いはあるものの、家や個人が強く結びつくことで、ムラの生活を確かなものにしてきたといえる。同族関係や擬制的親子関係は、ムラの階層性とも強く関連している。例えば、新戸がシンルイとなる家を探す場合、網元など富裕且つ権威のある家にタノマレシンルイになってもらう。シンルイは基本的に対等な結びつきだが、複数のシンルイを持つ場合、イチシンルイ、ニシンルイというようにシンルイに序列が生じる。擬制的親子関係であるエボシオヤ、ナモライオヤの場合は、個人の資質もからむが、やはり富裕な家にオヤを頼むことが多い。このように経済活動と社会関係、家連合の序列が重層する中で、性と年齢の秩序に基づく契約講は最もフラットな社会関係といえる。

契約講は、宮城県・山形県など東北地方を中心に分布する互助協同組織であり、牡鹿半島の場合は一般的な戸主会形式に加え、年齢による加入区分がある。家の後継ぎとなるカトクの男性は、18歳で実業団（契約講）に加入し、42歳で脱退した[2]。給分浜などでは実業団の上位にも庚申講などの年齢集団があるが、実業団がムラの中心組織として寄合の機能を持っていた。

このような年齢階梯集団は女性の側にもあり、女性は結婚してから38歳まで女講中に加入した。牡鹿半島の女講中は、地蔵講と山神講[3]の信仰集団であり、縁日に講を催すほか、若い講員を中心に旧小牛田町（現美里町）の山神社に参詣してきた。講や集団での参詣は、嫁たちにとって精神的な支えであるだけでなく、楽しみの一つでもあった。こうした信仰的講集団という性格のほかに、ムラによって様々な役割や機能を持っていた。例えば、産婆がいた大原浜では、女講中と産婆の関係が強く、「御年始」として礼金を渡す慣習があった。小淵では昭和初期頃まで、祝い事のある家で踊りや唄を披露するオメツキがおこなれていた。このオメツキは、三陸沿岸部の漁村で不漁時に縁起を担ぐタル入れという宴会の形態の一つと思われる。このようなムラ固有の役割のほか、牡鹿半島一円で共通していた機能として、婚礼衣装やお膳の貸出や、嫁入道具の運搬がある。お膳の貸出は、他の三陸沿岸部漁村や宮城県内の内陸農村では、契約講の役割になっているところが多く、牡鹿半島女講中の地域的特徴であるといえる。

このように、女講中は信仰や娯楽のための集まりとしてだけではなく、機能的役割を持っていた。ただし、最初から様々な機能や制度を備えた組織として始まったわけではないようである。講集団としての始まりは、大原浜の山神塔に「大原濱/享和三年/二月吉日/女連中」あることか

2　多くのムラが、昭和20年代に18歳（あるいは高校卒業後）～42歳を年齢区分として規約に明文化しているが、18～45歳という年齢区分を採用しているムラ（小淵浜）もあり、必ずしも一様ではない。また、少子高齢化と過疎化が進むムラでは、脱退年齢を延長しているため、組織の平均年齢が高くなっている。

3　本稿では、牡鹿半島における年齢集団のうち、結婚した女性が最初に入る集団を女講中と呼ぶ。女講中とは、表浜の大原浜、給分浜などで記録として表れる呼称であり、これらのムラでは「女講中」とも言うが、口頭では「ジゾッコウ（地蔵講）」と呼ばれることが多い。しかし、この講集団は地蔵講だけではなく山神講としても機能しており、組織体として見る本稿においては、混乱を避けるため女講中で統一する。なお、鮎川浜北では、地蔵講も山神講も組まれず「定義講」が存在し（牡鹿町誌 1988:247）、谷川浜・大谷川浜では山神講が組まれず「ズゾコウ（地蔵講）」だけであるが、いずれも年齢による加入上限がある。

ら、藩政期末にはすでにムラごとに嫁集団が組まれていたと思われる。また、大原浜女講中所有の食器具のうち、最も古い飯椀・吸物椀の外箱には「大正拾壱年/旧正月十二日/地蔵講中」とあることから、膳腕貸出等の役割は大正期に始められたと見られる。ムラの女性の紐帯として、また村落集団として機能してきた女講中は、昭和40年代後半より衰退し始め、平成10年代前半までに、牡鹿半島のほとんどのムラで解散した。戦後、高度経済成長期の時代において、牡鹿半島村落の女性集団はどのような結びつきの形を選択していったのか。昭和20～40年代の大原浜・給分浜・小淵における女性集団と個々の女性のライフコースの変容から、嫁たちのムラとの関わり方を明らかにする。

II，嫁のライフコースの多様化―女講中への加入を基準として―

1，制度としての「入れない嫁」―女講中の組織原則―

牡鹿半島の年齢集団は、男女それぞれ契約講と女講中を始まりとして、年齢ごとに上位組織（女性であれば女講中→観音講→念仏講など）に移っていく。上位組織になるほど加入は任意性が強くなる。ただし、最初に加入する契約講と女講中は、次の条件を満たすと加入することが義務付けられていた。その条件とは、1つは年齢、もう1つはカトク（家督）及びその妻であることである。

分家や別家などの新戸はカトクとは見なされない。契約講では「二三男も独立して世帯を持ったばあいは講員の了解をえて加入金をだせば加入できる」（給分浜）（平山 1969:98）などの取決めがなされ、特別に加入が許された。契約講への加入は村落成員資格を得るのと同義であり、漁業や共有林の管理、寄合、道普請などを行うムラの中心組織だった[4]。女講中も、カトク以外に嫁いだ者は基本的に加入できなかった。つまり、ムラには契約講や女講中に「入れる」者と「入れない」者が混在していたといえる。ただし、男女の年齢集団は独立しており、夫婦揃いとして扱われたわけではなかった。例えば、新戸の世帯で夫が契約講に入る許可を得られなくても、女講中が許せば妻は仲間入りすることができた。このため、ムラの女性社会において女講中は最も中心的な位置づけであり、独自の裁量権を持ち、制度や機能はムラによって異なっていた。嫁は女講中で嫁ぎ先のムラでの暮らし方を学び、ムラの女性社会をリードする存在となるべく教育されていたといえる。

小淵では、1955（昭和30）年頃まで、カトクの妻に女講中への加入を義務付け、一方で、新戸の妻には加入の制限をおこなっていた。藩政期の小淵は、江戸廻米船をはじめとする廻船の寄港地であり、明治期の大謀網漁では気仙地方から大網子を雇い入れていたため、外部からの人の出入りが激しかった。もともと小淵は給分浜の端郷だったが事実上独立しており、昭和に入ってからは特に人口の増加が著しく、1935（昭和10）年：91戸628人、1950（昭和25）年：140戸

4　漁業組合や林野組合、区会など行政の末端機関として各機能が独立していったことにより、現在は祭祀組織としての役割のみをとどめている

960人、1965（昭和40）年：177戸1035人と、平成に入るまで戸数は漸次増加してきた[5]。女講中の加入に明確な区別をつけ、昭和中頃まで維持していたのは、こうした歴史的背景も関連していると思われる。

ちよ子さん（仮名）は、女講中に「入れなかった」1人である。ちよ子さんは1936（昭和11）年に小淵の漁師の家に生まれ、20歳のとき結婚した。夫は小淵漁師の二男で、家は長男である兄が継いだため、小淵に居を構えたちよ子さん夫婦は、分家という位置付けになった。ちよ子さんに女講中への誘いがくることはなく、ちよ子さんは小淵の村落集団に入ることがないまま現在に至っている。

他方、ちよ子さんの幼なじみ・花代さん（仮名、1940（昭和15）年生）は、すぐに女講中に仲間入りしている。花代さんもちよ子さんと同じく小淵の漁師の家に嫁いだが、夫は長男でカトクだったためである。花代さんは女講中でトメチョウ（当前長：小淵における女講中の代表）を務め、脱退後も観音講や婦人会など上位の女性集団に加入した。

ちよ子さんと花代さんは、嫁入後、ムラにおいて異なる暮らし方を送ることとなったが、両者の交際が「入れた」者と「入れなかった」者とに変化したわけではなかった。ムラにおける嫁たちのつきあいは、女講中の仲間にだけ生じたわけではないからである。2人が嫁いだ昭和30年代、小淵には水道やガスが整備されておらず、水汲みや枯れ枝集めは嫁の仕事だった。特に、水揚げされたシラスを釜茹でにするため、燃料となる枯れ枝を大量に貯えておく必要があり、漁家の嫁たちは女講中の加入に関係なく、同じ年頃の者たちで連れ立って山へ入った。許されている共有地に適当な枯れ枝がないときは、嫁たちはこっそりと立ち入り禁止の山に入ることもあり、このような秘密も、女講中ではなく同世代の私的な仲間たちの間で共有されていた。ちよ子さんと花代さんの場合、結婚前から親しい仲だったこともあるが、女講中だけが嫁たちの交際の全てではなかったといえる。

ムラの嫁たちを2つに分ける秩序について、嫁たちはただ規則として従っていたのではなく、カトク・新戸それぞれの嫁のある条件の違いによって納得していた。その条件とは、姑との同居である。昭和30年代の牡鹿半島の嫁の仕事は、陸仕事・田畑の管理・家事、そして育児だった。小淵では加工までが女性の仕事であり、水揚げされたエビやシラスは、天秤棒で各家に持ち帰り、釜で茹であげたのちに天日で乾燥させ、石巻の水産業者に引き渡した。田畑の管理には男性は関与せず、農繁期の人手の確保まで嫁が仕切った。一方で、女講中は地蔵講や山神講としての集まりのほか、婚礼道具の貸出など様々な役割があり、なかなか多忙だった。ムラによって異なるが、講行事も年6～12回程度あり、そのたびに食事の支度も休まなくてはいけない。したがって、女講中講員の嫁には姑の協力と理解が欠かせなかったのである。花代さんの場合、講のある日は姑が仕事を代わってくれ、宿が回ってきたときは、料理を作るのも手伝ってくれたという。

5 『牡鹿町誌』上巻によるが、人口の原資料は1935年のみ「斉藤報恩館時報」126号、1950年以降は国勢調査とある（牡鹿町誌 1988:493）。また、産業別就業人口の原資料は1935年は昭和27年度「大原村村勢要覧」、1940年以降は「町役場文書」とある（牡鹿町誌 1988:494）。

夫婦2人の世帯ではこうした助力が得られないため、たとえ規則がなかったとしても、現実的に加入することが難しかった可能性がある。

給分浜のフミ子さん（仮名、1950（昭和25）年生）も、女講中に入ることができなかった[6]。フミ子さんは仙台の高校を卒業し、石巻に就職したが、20歳の時給分浜の実家に帰り、同年裏浜出身の男性と結婚して、給分浜に居を構えた。したがって、フミ子さんも女講中加入資格のある“カトクの嫁”ではなかったことになる。ただし、フミ子さんが結婚した昭和40年代の給分浜女講中は、規則的にはすでに嫁は誰でも入ることができるようになっており、1952（昭和27）年に給分浜の男性（次男／カトクではない）と結婚した女性は女講中に入っている。フミ子さん自身も、子供の手が離れた頃に女講中に入ろうとしているが、「子供のための集まり」と感じて諦めている。自分には子供の面倒を見てくれる人がいない、だから結婚してすぐに女講中に入ることはできなかった、とフミ子さんは説明する。更に、女講中への加入は、姑とともにトガシラ（当頭：給分浜における女講中の代表）仲間入りのお願いをし、姑に付き添われて最初の講に参加する。カトクの妻という加入資格は、嫁が女講中で活動するにあたり不可欠な姑の存在と一体的だったといえる。

昭和30～40年代の小淵・給分浜の嫁には、女講中の講員だけではなく、ちよ子さんとフミ子さんのように制度的・状況的に「入れない嫁」が少数派ながらいた。女講中の講員は、花代さんのようにトメチョウなどを経て、ムラの女性のリーダー的な存在として経験を積んでいくが、女講中に入れない嫁は、社会関係や権利が阻害されるわけではないものの、こうした機会が少なくなる。フミ子さんは、後に婦人会長である叔母の誘いを受け、婦人会に加入するが、このようなムラの一員としての活動は育児が一段落するのを待たねばならなかった。

2，「入れない嫁」の過渡期―制度から姑個人の判断へ―

先項の「入れない嫁」は、女講中の制度上生じる「入れない嫁」だった。そして更に、女講中で活動していくためには姑の存在が重要だった。給分浜・小淵の女性は、ムラの女たちの決まり事として女講中の制度に従ってきたといえる。他方、大原浜では、女講中加入をめぐって、姑の判断により重きが置かれていた。

大原浜は旧大原村の中心地で、表浜地域の在町である。藩政期には伊達家の御仮屋や御制札場が置かれ、大原馬の産地として駒市が開かれてきた。1889（明治21）年に大原村が発足すると村役場や小学校等が置かれた。近世には大謀網漁で栄え、階層化が進んだが、明治以降は小売店や問屋、勤め人が増えた。このため、牡鹿半島や周辺の漁師と縁組をする小淵などの漁村に比べ、大原浜は婚姻圏が広く、農家などから嫁を迎える傾向があった。

逸子さん（仮名）も、1933（昭和8）年に河南町（現石巻市）の農家に生まれ、1956（昭和31）年に大原浜有数の網元の家に嫁いできた。義父は既に鬼籍に入っており、勤め人の夫が戸

6　2008年2月、狩野春江氏の聞き取り調査による。

主となっていた。したがって逸子さんは"カトクの妻"として女講中に入ることのできる立場だったが、姑は女講中や婦人会などの集まりを嫌がった。嫁である逸子さんに対して、家の中で、家事、田畑仕事、子育てに専念することを望んだためである。1931～1965（昭和6～40）年につけられた大原浜女講中の会計簿には、逸子さんの姑の名前が散見され、女講中の活動への関与が窺えるが、逸子さん本人の名前は出てこない。このことは、逸子さんが女講中として活動しなかっただけではなく、道具の貸出など女講中の事業についても、逸子さんが利用しなかったことがわかる。

同じく大原浜の智恵子さん（仮名、1933（昭和8）年生、仙台出身）[7]も、姑に止められて女講中へ加入しなかった。夫は竹細工職人で、住み込みの弟子を含めると、嫁いだ時は11人家族の大所帯だった。夏には20人近くまで増える年もあり、姑は智恵子さんに女講中より大家族の切盛りを優先することを求めた。智恵子さんは姑の意向に従い、女講中には入らなかった。

住民の多くが漁業に関与する小淵・給分浜と違い、逸子さん・智恵子さんのように、大原浜の家業は多様であり、勤め人の割合も高い。したがって、姑が嫁に求める価値観も家ごとに異なり、昭和30年代の大原浜では家の事情による任意性が強くなっていた。大原浜では、牡鹿半島的社会に共通する秩序である年齢集団より、家や個人の都合（姑）が比較的優先されやすくなっていたといえる。

3，仕事と女講中―ライフコースの固定から選択へ―

漁業のさかんな牡鹿半島では、男性は漁、女性は陸仕事というように明確な役割分担が為されてきた。田畑を守り家事を行うのが一般的な嫁の生き方だった。都市や内陸農村から距離があるため行商もさかんではなく、嫁が個人で収入を得ることがなかった。他方、昭和初期既に女性が家の外で職に就く機会はあり、『牡鹿町誌』上巻に「昭和九年に[郵便局に]増築された二階建ての電話交換室は今だに概観は損なわれずに残されて居る。戦時中はこの二回で遠藤（旧姓石森）まさ子さん（寄磯浜）、吉田こと子さん（大原浜）、佐々木フミ子（故人）等のうら若き交換手たちが、空襲に脅えながらも二〇数個の加入電話を守り続けていた」〔牡鹿町誌 1988:548〕と記述されているように、大原浜で電話交換手として働くほか、役場や郵便局、鮎川浜の捕鯨会社などへ勤める者もいた。ただし、多くは小学校高等科もしくは中学校卒業から結婚するまでの数年間だけであり、結婚後も仕事を続ける女性は昭和20年代にはきわめて稀だった。

小学校教員だった恭子さん（仮名、1930（昭和5）年生）は、小淵・給分浜・大原浜周辺では唯一の、昭和20年代に嫁と勤めを両立させた女性と思われる。恭子さんは高等科卒業後、石巻実科高等女学校に入学した。看護婦になりたかったが、小柄で丈夫でなかったため教員を目指した。しかし、太平洋戦争終盤だったため授業は満足に行われず、終戦後、まともに授業を受けることもないまま卒業し、給分浜の実家に帰った。学歴の高い女性が少なかった当時、恭子さんは

7　2007（平成19）年10月、松岡薫氏、横山美有寿氏の調査による。

代用教員として勤務することになり、職務の傍らで正式な教員免許を取得した。改めて教員として赴任した大原小学校で夫に出会い、結婚することが決まると、恭子さんは引き続き教員として働くことを希望した。同じく教員の夫と舅・姑がこれを受け入れたので、恭子さんは勤務校を変え、50歳で退職するまで嫁と教師の二足の草鞋をはくこととなった。退職後も大原浜の婦人会には入らずに、牡鹿町の少年更生運動に従事した。

恭子さんは、女講中へは一度も入らなかった。嫁として家事を行うのと学校勤務で忙しく、日中に行われる講行事には参加できなかったからである。当時、手に職を持つ既婚女性は産婆や裁縫の先生などで、恭子さんのように勤めている者はいなかった。

昭和20～30年代に女講中加入年齢だった大原浜女性たちによれば、女講中とは「特に支障がなければ入るもの」であり、同時期の小淵の女性が「必ず入るもの」と語るのには温度差がある。こうした大原浜女講中の認識に、姑の判断による「入れない嫁」や恭子さんのような働く女性の存在があったことは無関係ではないだろう。昭和30～40年代にかけて、女講中を嫁の唯一のライフコースではなく選択肢の一つとして見なす傾向が、大原浜においてはより当たり前となっていった。昌子さん（1947（昭和22）年生）や、美奈子さん（1950（昭和25）年生）らが大原浜に嫁いできた昭和40年代には、働く嫁が珍しくなくなっている。鮎川浜出身の昌子さんは、電話交換手として大原浜に通勤し、郵便局に勤めていた大原浜の男性と知り合い結婚した。結婚後も郵便局に勤務し、女講中には入らなかった。美奈子さんは最初の2～3年だけ女講中に入ったが、平日の講行事に参加することができず、やめてしまった。ただし、美奈子さんは退職後婦人会に入っており、大原浜婦人会の会長を務めた。

恭子さん、昌子さん、美奈子さんが嫁いだ家は、舅の代からすでに勤め人である。姑は家におり、嫁の家事や育児を手助けすることができたため、彼女たちは勤めに出ることができた。漁業を生業とする家では、労働を家族成員で分担するため、嫁は貴重な労働力であり、勤めに出ることは難しい。同時代の小淵・給分浜と大原浜で、女講中の加入状況が異なるのは、先項で触れた村落秩序意識の程度に加え、婚家の家庭環境による嫁の労働内容の違いもあるといえる。

III，帰属集団の選択の多様化―役割集団としての婦人会と嫁のネットワーク―

1，女講中の意義のゆらぎ―漁村女性の生業の変化との関連性―

前章では、昭和20年代、在町である大原浜と漁村である小淵・給分浜の女講中加入をめぐる差異を、家と嫁の関係から述べた。大原浜では講より家が優先される傾向があった一方で、小淵・給分浜ではカトクの妻を女講中に行かせることは姑にとっても義務だった。講のある日は、嫁を早く仕事から上がらせ、その日の炊事を代わるなど、嫁が講に参加できるよう計らった。こうした姑の態度は、姑が嫁の仕事を把握し交代することができるからこそ可能であり、ムラではごく当たり前に行われた嫁姑関係だった。しかし、大原浜で嫁が勤めに出ることで女講中加入の任意性が強まったように、小淵・給分浜でも昭和40年代から嫁の仕事に変化が生じ、姑がそれを代わることが難しくなっていった。それは、旧牡鹿町が進める事業との関連から起きた。

リアス式の入り組んだ地形のため、牡鹿半島の陸路は困難な山道であり、裏浜では戦後まで巡航船が石巻・女川への主要な交通手段だった。昭和初期からバスが運行し始めた表浜も、悪路のため自動車の普及が進まず、流通を妨げていた。鮎川浜に至る金華山街道の改修工事は、牡鹿半島だけではなく石巻や渡波等周辺町村の長年の課題だったといえる。1955（昭和30）年に鮎川町と大原村が合併し、牡鹿町が発足すると、町は半島全体の交通格差をなくすため、町道の建設・延長を進めていった。そして、町の産業に漁業と観光を掲げ、1968（昭和43）年、女川町と鮎川浜を結ぶ有料道路・コバルトラインの整備が着工された[8)]。

コバルトラインの開通は半島を挙げての大事業だったが、もともと観光地ではなかった各ムラには工事関係者の宿泊施設が圧倒的に不足していた。そこで、旅館のない小淵や給分浜で民宿を開業する家が現れ始めた。小淵出身の利子さん（仮名、1953（昭和28）年頃生）の嫁ぎ先も、この時期に民宿経営を始めた一軒である。

利子さんは18歳の時、養殖・定置網等漁業と民宿旅館を営む給分浜の元網元の家に嫁いだ。民宿経営は、1969（昭和44）年に家を新築した折、コバルトライン建設に携わる作業員の民宿を作ってほしいと打診され、大姑と姑がこれを受けたのが始まりだった。利子さんは、漁家の嫁がしてきた仕事に加え、食事作りや掃除など、民宿のサービスにも関わることになった。利子さんが嫁いだ当初は母屋に客を泊めていたが、徐々に民宿経営が軌道に乗ると、1982（昭和57）年には宴会場を増設し、本格的な旅館化を進めた。更に1995（平成7）年、宿泊施設と母屋を個別に新築すると、代替わりして利子さんが女将となった。

客の都合に時間を拘束される民宿の仕事は、漁業や家事、田畑の仕事と違い、時間的な融通が利かない。利子さんはカトクの妻だったため、姑に連れられ女講中に入りはしたものの、日中に集まる講と、客室の清掃や夕食の仕込みをしなくてはならない民宿業の折り合いがつかず、一年半ほどでやめてしまった。姑が民宿業から手を引いてからは、全て利子さんの差配で行うようになったため、少しの時間抜けて姑に代わりに働いてもらうというわけにもいかない。忙しく大変である反面、利子さんにとって最もやりがいを感じる仕事でもある。

民宿業を始めた利子さんの家に限らず、牡鹿半島の漁家にとって、昭和40年代は生活や生業の構造が変化する過渡期だった。モータリゼーションや冷蔵技術が発達したことで、出荷の前に小魚を加工する必要がなくなり、女性の陸仕事が大いに軽減した。一方で、表浜ではワカメや牡蠣などの養殖が増加し、収穫期には分別や加工の仕事に日給で人を雇うようになった。このことは、女性にとってアンペイドワークだった漁業が、ペイドワークの領域に入り込んだことを意味している。農業が機械化する以前、稲作の農繁期におけるテマドリやテツダイは女性の有償の互助関係だったが、現物支給ではなく現金を直接手にできることは、それが家の為に使われるとしても、漁村女性の中に自立と個人主義を促していった。

ところで、利子さんは女講中をやめた理由をもう一つ挙げている。嫁たちにとって息抜きとな

8　1995年4月から通行料金が無料になった（牡鹿町誌 2005:58）。

るはずの集まりが、自分にとっては息抜きにならなかったためである。それは、女講中講員の年齢幅にある。昭和40年代の給分浜では、嫁は20歳頃に嫁ぎ、女講中に入り、38歳になると抜けた。利子さんにとって女講中は、「上は37歳の人までいるわけでしょう。20やそこらで嫁いだ若い人では話も合わない」のであり、18歳で嫁いだ自分にとっては娯楽どころか緊張の場だったと述べる。実際の女講中活動においても、トガシラから新入りまで年功序列が敷かれており、高齢になっても「講の仲間」として交際を親密にしているのは、年齢差にしてせいぜい10歳以内である。女講中はムラの年齢秩序の一部であり、嫁が嫁ぎ先社会に溶け込むきっかけになってはいても、組織そのものは親睦グループではないわけである。

他方、小淵の美恵子さん（仮名、1940（昭和15）年生）は、女講中を小淵の女性を結びつける村落組織として重視していた。美恵子さんは満州に生まれたが、母親が小淵出身だったことから、戦後家族で小淵に移住し、長女の美恵子さんは婿を取って両親の開いた小売店を継いだ。美恵子さんは、女講中のトメチョウや若妻会、婦人会の会長を次々と務め、同世代の嫁たちにとってリーダー的な存在だった。既にオメツキ（小淵女講中独自の即興芸）などいくつかの習慣はおこなわれなくなっていたものの、唄や踊り、お経、様々な慣習を引き継いでいかねばならないと考えた美恵子さんは、唄の師匠を呼んで稽古してもらうなど、新人講員に覚えてもらえるよう働きかけた。同じく漁村の給分浜では新入りの加入に陰りが生じていたのに対し、小淵の女講中は高いモチベーションを保っていたといえる。給分浜では昭和50年代初めに女講中は衰退したが、小淵では2000（平成12）年頃まで活動が続いた。

給分浜の利子さんが感じたように、講員の広い年齢幅が女講中の魅力を減らしていたとするならば、小淵女講中ではどうだったのだろうか。（表）「大原村の職業別戸数」を見ると、1954（昭和29）年時点の給分浜と小淵では戸数の開きが倍以上もあり、更に年々拡大している。小淵では、女講中はカトクの妻しか入れないという規則でもなお講員の人数が多すぎる事態となった。このため、美恵子さんによれば、彼女がトメチョウを務めていた時期、女講中の上限の年齢を38歳ではなく33歳に引き下げて、講員の人数を調整していたのだという。講員同士の年齢の開きが小さいことにより、小淵の女講中は給分浜の利子さんが抱いたような緊張感が生じにくくなり、まとまることができたといえる。年齢幅の件は要素の一つに過ぎないが、生業形態の変化やリーダー的存在の有無などいくつもの要素が積み重なったことにより、小淵の女講中は結束することができ、また、人口の多い地域だからこそ、紐帯の役割が求められたといえる。

昭和40年代は、給分浜・小淵においても女性の生活に変化が生じ、個々の嫁たちに女講中の意義を意識させることとなった。小淵では、若い嫁たちの結びつきとして女講中が継続されたのに対し、給分浜や大原浜では、時間に余裕があるときの「茶飲みの集まり」に意義が縮小されていった。

昭和40～50年代、大原浜の実業団（契約講）と女講中は衰退の憂き目にあい、これをめぐる講員の対応により、それぞれ復活と停止という真逆の結果に落ち着いている。大原浜の実業団は、団員の減少や業務の独立（森林組合など）による役割の減少のため、昭和40年代初めに一度活動を休止した。しかし、1976（昭和45）年に復活に向け有志が奔走し、翌年、祭祀団体として実業

団は復活を果たした。一方で、女講中は昭和50年代後半に活動を停止したまま、再度講として集まることはなかった。最後の講員はわずか6名であり、茶飲みに集まるためにあえて講という形態をとらなくても、必要に応じて集まれる人数となっていた。大原浜で生まれ育っている男性と、外部から嫁いできている女性という点で講集団に対する思い入れに違いがあるともいえるが、実業団が祭祀という替えの効かない役割を負ったことが、実業団のモチベーションに繋がっているといえる。

生業の多様化により嫁の生活はムラで一様のものではなくなり、個々に相違が生じた。女性の組織は、祈りや思いを共感することより、ムラの組織集団として活動することに意義を見出していくようになった。

2，女講中衰退の内面的理由―経済的基盤と役割の喪失―

女講中衰退について、活動内容など内面的理由からも触れておきたい。

女講中の主目的は信仰であり、その他に嫁集団として、ムラごとに独自の行事や機能（小洲のオメツキや大原浜の産婆礼金など）を持っていた。中でも、女講中の経済的基盤及び社会的役割として最も重要だったのが、婚礼との関わりである（齋藤 2010）。

牡鹿半島及び周辺島嶼（田代島、江ノ島等）の婚礼では、女講中が嫁入道具を運ぶ習慣があり、長持担ぎ、あるいは長持渡しと呼ばれていた。嫁入道具を婿方に渡すとき、婿方から礼金をもらうことができた。牡鹿半島では、嫁を他村の家に送り出す場合、婿方には簡単には引き渡さず、嫁入道具に飛び乗って「うちのいい娘をやるのだから、これでは足りない」などと文句をつけた。この応酬により婿方からの礼金の金額は上がり、これは全て女講中の収入となった。

女講中はこれらの貯えを、婚礼道具やお膳の購入にあてている。大原浜の女講中会計簿によれば、1947（昭和22）年に振袖を購入しており、他のムラでも同じ時期に婚礼衣装を揃えたと思われる。婚礼衣装のほか、酒樽や盃など婚礼に用いるもの、膳腕など食事に用いるものが購入されており、膳椀は箱書と会計簿より1921～1967年（大正10～昭和42）にかけて繰り返し補充されていることが分かっている。膳腕は婚礼時だけではなく、実業団の総会や各家の葬儀にも貸し出された。道具の貸出は新たに収入となり、女講中は利のいい経済システムを得ていたといえる。

しかし、昭和50年以降は、婚礼の場が自宅から結婚式場やホテルに移り、家から家への嫁入道具の運搬もおこなれなくなったため、女講中は収入を得ることができなくなった。また、宴会においても割烹やケータリングを利用するようになり、膳椀を借りる人も減っていった。現存する大原浜の女講中会計簿は1965（昭和40）年を最後に記録が途絶えているが、昭和50年代の女講中の講員はすでに会計簿をつけておらず、活動費用も個々人の負担となっていた。

女講中衰退には、講としての役割の減少と経済的事情も背景にあったと考えられる。

3，ムラの秩序から役割集団へ―女講中から婦人会への転換―

さて、昭和40年代、ムラの集団に娯楽性よりやりがいを求める傾向が強まったことにより、ムラの女性社会の中心は女講中から婦人会に移っていった。牡鹿半島のムラでは、男性の契約講・

女性の女講中を中心とした伝統的な年齢集団とともに、青年団や婦人会など全国的な組織集団が併存していた。伝統的な村落集団に未婚者だけの集まりがない牡鹿半島では、青年団や女子青年団は、契約講や女講中の影響下に置かれつつも夜学会など独自に展開し、ムラの教育や文化活動に寄与した。婦人会組織の始まりは、1905（明治38）年、旧大原村に愛国婦人会が組織され、大原村村長が地方委員、夫人が協議委員を務めたのが最初と見られる。1912（大正1）年時点における旧大原村の婦人会会員数は53人にのぼり、旧鮎川村の会員数39人だったのを踏まえると、戸数比的に見ても熱心だったといえる[9]。戦争の足音が近づく1937（昭和12）年頃、大日本国防婦人会が牡鹿半島にも組織さるが、旧大原村では当時の愛国婦人会会長が国防婦人会の分会長を兼任したことで、ほぼ同じ組織として定着した。ほかに大原村では大正期～昭和初期に、婦人警火会という消防団の後援会的な独自の組織が存在しており、戦前の既婚女性たちの積極的な村落活動が窺える。

国防婦人会は戦後に一度解散した後、旧鮎川町及び旧大原村婦人会として設立され、各ムラに組織された。もともとからある女講中は村落内の女性集団として見なされていたため、婦人会は村落外に対する村落女性代表と位置付けられることで、差別化された。また、女講中に入る若い嫁は、講習会である若妻会にも参加しており、これらの事情から暗黙の内に、“女講中を抜け、子育てが一段落した人が婦人会に入る”という了解が定着した。この年齢層に当てはまるのが、女講中の上位集団である観音講等壮年女性の講集団である。観音講は縁日の講行事以外に特に役割等を持っていなかったので、加入者の顔ぶれがほとんど同じ婦人会に吸収されるように、いずれの村落でも昭和前期に衰退した。

Ⅱで紹介した、女講中に入らなかったフミ子さん（給分浜）、昌子さん（大原浜）、美奈子さん（大原浜）は、婦人会には参加している。婦人会は、宮城県や牡鹿町の婦人会連合の集会のほか、村落集団としても活動してきた。昭和40年代の給分浜婦人会では、災害時の炊き出し（火事・遭難・津波など）、鮎川鯨祭や町民体育祭等へ参加、敬老会の実施などをおこなっており、大原浜や小淵もほぼ同様である。なお、活動費には国民健康保険・国民年金保険の集金手数料をあてた。

ムラに貢献してきた婦人会だが、県や町規模の会議にも出席することが負担となり、ムラ婦人会の幹部後継者に苦しむこととなった。2005（平成17）年に牡鹿町が石巻市に合併されたことを契機に、牡鹿町婦連も解散することが決まり、各ムラの婦人会も同時に一度活動をとりやめた。しかし、ムラの事情として女性集団が一つもなくなってしまうと、有事の対応や祭りの用意において支障をきたすようになり、徐々にその存在の重要性が認識されていった。給分浜や小淵は婦人会を解散したが、2001（平成13）年に発足した表浜漁業協同組合女性部が、ムラの女性集団とし機能している。大原浜では、町婦連解散後も大原浜独自の組織として婦人会が継続されている。平成20（2008）年度の大原浜婦人会では、大原浜運動会への協力、祭りの協力（年2回）、

9　『牡鹿町誌』中巻による（牡鹿町誌 2005:614）が、原資料は『明治四十四年　宮城県牡鹿郡勢一班』とある。

敬老会実施、講員を対象とした月1回の体操教室、総会がおこなれた。

このように、存在の重要性が再確認された婦人会・婦人部は、ムラの女性集団として明確な役割を負っている。ムラの秩序として嫁たちをとりまとめ、序列を与えた女講中とは、女性の中心組織といっても質的にも編成的にも異なる。女講中から婦人会への転換は、ムラの女性社会の再編成を意味している。

4．高度経済成長期後の女性集団とネットワーク―外国人嫁の交際範囲から―

経済の高度成長により牡鹿半島の産業や生活が大きく変化した。コバルトラインの開通以降、漁業と観光が牡鹿町の主要産業に掲げられ、また、漁業者採集から養殖への転換により安定とブランド化を図るなど、一層の盛況が期待されていた。全国的には、農村の人口流出と兼業農家の増加が起こり始めていたが、捕鯨基地のある鮎川浜や漁船漁業や養殖で賑わう小淵ではこの間も世帯数は増加し続けていた。一方で、進学率が上がるに従い、大きな産業のない勤め人社会の大原浜では、石巻や仙台の学校を卒業した後そのまま現地で就職する者が増え、人口流出に歯止めをかけることが出来なかった。

更に、高度経済成長が収束した後、水産業をめぐる国際的な取り決め等により、牡鹿半島の産業にも大きな影響が出た。最も大きな打撃となったのが、国際捕鯨委員会で1982（昭和57）年に議決された商業捕鯨の一時停止措置である。外来資本だった捕鯨会社は鮎川浜から去り、牡鹿半島は大きな雇用先を失った。1955（昭和30）年には13,753人だった牡鹿町の人口は、石巻市合併直前の2004（平成16）年には5,239人まで減少している（牡鹿町 2004）。

こうした昭和50年代の状況において、女講中をはじめとするムラの組織も弱体化していった。女性は家の仕事に従事し、カトクの妻は女講中に入る、という従来のライフコースをたどらなくても、どこへでも車で出かけ余暇を楽しむことができるようになり、自分自身で暮らし方を選択できるようになった。

嫁入りする側の属性の多様化も進んだ。村内婚や半島内婚の多かった漁村でも婚姻圏の拡大が進み、昭和50年代後半からは外国人の嫁の姿がちらほらと見られるようになった。行政や漁協が結婚の仲介を務めているのではなく、友人の紹介や見合いの形式をきっかけとしている。牡鹿半島に暮らす外国人嫁の総人数は公開されていないが、筆者の調査では国籍はフィリピン、中国、韓国、台湾（2009年現在）で、旧牡鹿町域の全人口に対し20人にも達していないと思われる。

牡鹿半島の外国人嫁のうち、もっとも多いのがフィリピン人である。日本では外国人女性との国際結婚のうち、日本人男性とフィリピン人女性の組み合わせが最も多く、3割強にのぼる（山下 2009）。ただし、エンターテイナーとして来日し結婚する都市部のケースに対し、地方のケースは結婚のため来日しており、来日理由が異なるため一概に見なすことはできない。

フィリピン人の理江さん（仮名、1975年生）は、2000年に漁師の男性と結婚して、表浜のあるムラに嫁いできた。ムラにフィリピン人は彼女ひとりである。理江さんの友人には日本人と結婚していた者もおり、理江さんはもともと国際結婚に対して関心を持っていた。夫との出会いも、日本人男性と結婚した友人に紹介されてのものだった。

理江さんは母語のフィリピン語のほか英語が話せるが、日本語は学んだことがなく、現在もやや片言である。理江さんは、役所で手続きを行うのも、運転免許を取得するのにも、英語を使用できたため、他の言語圏の人ほど問題には感じなかったのだという。日常生活で困ったことが起きたりした際には、他のムラに住むフィリピン人妻に相談した。牡鹿半島の村落社会では、何かあった時にはシンルイに相談するのが問題解決の定石とされてきた。しかし、理江さんは言葉や習慣の異なるシンルイや近所を当てにするより、同じフィリピン人嫁たちを頼りにした。フィリピン人嫁は近隣のムラにに3人おり、生活していてよく分からないことがあれば電話して尋ねる。お茶飲みなど息抜きする相手も彼女たちである。フィリピン人嫁の私的なネットワークは半島中に及んでおり、友人関係だけではなく、いざというときの互助的関係としても機能している。

一方で、理江さんと同じムラに住む韓国人嫁の直子さん（仮名、1956年生）は、同国人ネットワークを持たない。牡鹿半島に韓国人嫁がいないためである。嫁いできたのは理江さんと同じ2000年だが、韓国語では運転免許がとれないので、3年がかりで日本語を習得した。運転免許も取得でき、現在は夫とともに水産物輸送業を営んでいる。

フィリピン人の理江さんは子供が幼いため、仕事や村落行事への参加を控えめにしているが、直子さんはムラの婦人会組織にも所属している。フィリピン人ネットワークという疑似フィリピンのある理江さんと違い、仕事と大原浜の社会関係が日本における唯一の人間関係である直子さんは、ムラでの結びつきを大切にしている。

村を越える外国人嫁のネットワークは、牡鹿半島に同国人の仲間がいることが前提である。外国人妻という特殊な例ではあるものの、地縁以外を日常生活における結びつきとして選択している点で、女講中に「入らない嫁」たちと重なる部分があるといえる。

Ⅳ. 「入らない嫁」たちの結びつき―年齢集団という枠組みからの変化―

年齢集団・女講中に「入れる／入らなければならない」「入れない」「入らない」という嫁の対応を、昭和20～40年代という時代背景とともに考察した。早くから講加入を任意としていた大原浜、昭和40年代に変化した給分浜、高度経済成長期後も嫁の講として維持され続けた小淵では、ムラにおける産業構造、嫁と家の関係、講の在り方等に違いがあり、それぞれの要素が連関して、ムラごとの女性社会の秩序を形成していた。事例から、本稿では高度経済成長期における女性集団の変容について、次の2点に小括したい。

まず、ムラにおける女性の結びつきや集団が、ムラの女性社会にとってどのような意味を持つかという点である。嫁いでくる以上、嫁は外来者であり、婚礼によって家の者として承認され、ムラの女性社会に仲間入りしてムラの女として受け入れられる。後者には女人講への加入や女性だけの宴会があり、嫁はこれを通過することで村入りを果たすといえる。村入り、という語彙は、民俗学において正規・非正規の村人の区別を意味する。牡鹿半島の場合、女講中には男性の契約講と同じく、講員を限定する規則があり、ムラの嫁の中には女講中に加入できない者もいた。女講中を村落成員の尺度とするならば、「入れる嫁」は正式な村人、「入れない嫁」は非

正規な村人である。しかし、この区分は牡鹿半島の女性社会の実態を説明できているのだろうか。女講中に「入れる」嫁に比べ「入れない」嫁の社交範囲や経験数は確かに小さくなる。しかし、実際のつきあいのレベルと照らし合わせると、女講中はあくまで女性社会における秩序であり、嫁としての経験の共有に基づく交際は個別に行われていた。女講中は牡鹿半島の女性社会においてフォーマルな組織であり、これに関わらずインフォーマルな交際が別に行われていたといえる。しかし、大原浜のように、制度上「入れない」のではなく婚家の要請によって「入れない」、つまり個人（家）の選択がムラの秩序より優先されるようになる。それは、通勤者（特に勤めに出る嫁）の増加・漁家の複合生業化・婚礼の場の変化等、種々の要因が折り重なって生じた価値観の変容が背景にあり、選択的に「入らない」ことも可能になっていった。「入れる」「入れない」義務的な組織から「入る」「入らない」任意の組織に変わったことで、ムラの組織としてフォーマル性も希薄になった。しかし、女講中に代わる女性組織となった婦人会は、かつての女講中の役割をそのまま引き継いではいない。義務や制度としてではなく、ムラへの奉仕活動という役割を可能な者が行う形に、女性の紐帯が再編成されたといえる。

もう１点は、インフォーマルな結びつきの行方についてである。嫁入りしてくる女性たちは、女講中や共同作業の場で同世代との友人関係を築いていったが、ムラの集団への加入が任意になることで、そうした場が少なくなった一面はある。しかし、人口を見てみると、1955（昭和30）年には357人いた大原浜の女性は、2009（平成21）年には92人まで減少している。年齢集団のように年代ごとの集まりを維持するより、女性全体で一つの紐帯を作る方が効率的である。生活の全てが嫁ぎ先のムラでおさまっていた昭和30年代までとは異なり、勤務先や実家との結びつき等、ムラを越えて女性は人間関係を維持していく。ムラにおける女性社会は個人の女性にとっていくつかの人間関係の一つであり、年代に限定されない女性のコミュニティである。その中で、現代のムラを裏側から支える女性のインフォーマルなやりとりは続けられているといえる。

ムラでの結びつきは地縁である。しかし、トメやトナリグミといった地理的な結合や既存の講集団は、世代を経るごとに揺らいできた。その背景には、高度経済成長期を通して、ムラに暮らす人々の経験や世界観は世代ごとに大きく異なっていったことが挙げられる。インフォーマル的だからこそ、女性の結びつきの形式は揺らぎ、ムラという地理的境界を越え、その都度編成されていくといえる。

＜文献＞

佐野賢治.2011.「大宮講から若妻学級へ―高度経済成長期における農村女性の覚醒」田中宣一編『暮らしの革命 戦後農村の生活改善事業と新生活運動』農文協。

関沢まゆみ.2008.『現代「女の一生」』日本放送出版協会。

国立歴史民俗博物館編.2010.「討論」『高度経済成長と生活革命』吉川弘文館、146-148ページ。

高桑守文.1994.『日本漁民社会論考』未来社。

竹田旦.1969.「シンルイとその特性」和歌森太郎編『陸前北部の民俗』吉川弘文館。

靏理恵子.2007.『農家女性の社会学 農の元気は女から』コモンズ。

西海賢二.2012.『江戸の女人講と福祉活動』臨川選書。

平山和彦.1969.「牡鹿半島一帯における年齢集団の諸相―とくに契約講をめぐる諸問題―」和歌森太郎編『陸前北部の民俗』吉川弘文館。

宮本常一. 1984.『忘れられた日本人』岩波書店。

山下晋司. 2009.『観光人類学の挑戦 「新しい地球」の生き方』講談社。

安井眞奈美. 1996.「民俗学における「村入り」研究のその後―『座入披露帳』百年間の記録の分析より」『加納民俗研究』27。

和田健.2001.「ムラヅキアイに見られる現在的枠組みの再編成」『史境』42 歴史人類学会。

和田健.2008.「村の変容と村落」湯川洋司ほか編『日本の民俗6 村の暮らし』吉川弘文館。

石巻市史編さん委員会編.1998.『石巻の歴史』第二巻通史編（下の2）.石巻市。

牡鹿町総務課. 2004. 『牡鹿町町制施行50周年記念誌 牡鹿宝唄』牡鹿町。

牡鹿町誌編纂委員会編.1988.『牡鹿町誌』上巻.牡鹿町。

牡鹿町誌編纂委員会編.2005.『牡鹿町誌』中巻.牡鹿町。

宮城県水産試験場.1958.『沿岸漁業集約経営調査報告書（第1年度）』

宮城県水産試験場.1959.『沿岸漁業集約経営調査報告書（第2年度）』